「漢文」と「訓読法」を論ず

松尾善弘

導論

わが国で昔から親しまれている李白の「静夜思」は、本家の中国では「夜思」という詩題で愛誦されている。いま、前者の初句をA、後者の初句をBとすると次のような違いがある。

A　牀前看月光

B　牀前明月光

果たしてどちらがオリジナルなのであろうか。

A句の訓み下しは次の三様がある。よく国文学畑の方から非難される①訓読法は国文法にあわないものがある、②訓み方が不揃いであるを地で行く状態である。

イ．牀前×月光ヲ看ル

ロ．牀前ニ月光ヲ看ル

ハ．牀前ニテ月光ヲ看ル

A句は造句法から言えば、基本的に漢語の最も代表的な動目構造句〔S－V－O〕である。

漢語は漢詩句などの韻文を初め普通の散文の文章でも、一人称代名詞の主語（我）は省くのを常とする。また、「牀前」は場所詞であるから、A句は一見して現代漢語でいうところの介詞構造句と判断できよう。

A′（我）〈（在／於）牀前〉看――月光

仮にこの造句法で考えてよいとすれば、次例のようによく見られる形であるから、ハの訓みが最も相応しい訓み方ということになる。

芙蓉楼送辛漸／（我）〈（於）芙蓉楼〉送――辛漸／芙蓉楼ニテ辛漸ヲ送ル

現代漢語の統辞法から言えば、これが最も直截な解釈となろう。その証拠には、恐らくこの句法観点に立つからであろうが、王暁祥氏は「牀前」を「井戸の前」とする説を出している。（『床前明月光新解』中国人民大学出版社１９９０）

A句をA′句のいわば省略形と考えれば、「牀前」は人間が立って見回すことが出来るほどの広がりを持つ空間であることが望ましく、「ニテ」と送り仮名する根拠ともなる。だが、その途端、我われは作者が何故次句で「疑うらくは是れ地上の霜かと」とわざわざ分かりきった「地上」の語を持ち出さねばならなかったのかという疑問にぶつかる。「井

戸の前」は即「地上」になる筈だから、二句目で再度「地上霜」と言うことと矛盾するわけである。

ロの訓みを正当づけるためには、次の原構造句を想定しなければならない。

A″（我）看月光（於）牀前

A句はもとA″句であったものを、平仄や押韻等作句上の関係で語順を変えたと考えるのである。何よりもA句の正解はロであることがA″句の妥当性を裏付ける。因みにAB句の平仄式は〔平起り平終り型／平平平（仄）仄平〕で、軽い孤仄の禁を犯してはいるが、「二四不同」の原則に則り、「光・霜・郷」が下平七陽の韻を踏んでいる。

A″句の場合、注意すべきは「月光ヲ牀前ニ看ル」ところの「我」は必ずしも「牀前」に居るとは限らないことである。「月光」と「牀前」は密着した場にあるが、それを看ている自分はそこから遠く離れた場所にいる可能性もある。つまり、そのような解釈も成立しうるということは、逆にA句そのものが造句法上かなりぎこちない作られ方になっていることの証左ともなるわけだ。

前後したが、イの訓みについて考察を進めよう。いま、手許にある某『漢文入門書』で調べてみると、イのような訓み方について、「テニヲハをつけない方が漢語本来の断絶感を体現して（つまり、それは「孤立語」という特質を具えているという意味である―筆者）、ブツリブツリと切って読む方が漢文らしくてよいのだ」と訓読法のよみ習わしであるとの説明がなされている。

これが訓読解説者特有のごまかしの論理にすぎないことは、ではそう訓んだ時の主語は何なのか（「看」の主体者は誰なのか、まさか「牀前」ではあるまいに）、「牀前」は場所詞なのか（それも前記二解釈のうちのどれか）、状語なのか定語なのかを尋ねた時、明快な答は返って来べくもないことから判定しうることである。

例えばイの訓み方では、「牀前」を同音語の「承前、小善、蕭然、悚然」に取り代えても意味が通ずる。「承前」は無理としても「小善（ここでは仮に人名として）」その他、すべて上記文法用語を明示する筈の送り仮名を省いても成り立つではないか。

国文学畑の方からの指摘を待つまでもなく、漢文訓読法では副助詞「ハ」や格助詞「ガ」はつけない方が漢文らしくてよろしいのだと強弁する裏側には、常にこのような恣意性に依拠した誤釈が潜んでいることを見逃してはならない。

B句の訓み下しには次の三（九）様がある。

イ．牀前×／ニ／ニハ明月ノ光

ロ．牀前×／ニ／ニハ月光明ラカナリ

ハ．牀前×／ニ／ニハ明ラカナリ月光

A句にA′句やA″句からの変換が考えられたように、B句こそはもと「牀前」という場所詞を主題語（S^2）とし、「月光」を主体語（S^1）、「明」を形容詞述語とする主述述語句であったと考えられる。

B′　牀前月光明

言うまでもなく、押韻の都合で「月光―明」を転倒させたものであ

る。しかし実は、この句は初めからB句として造句されたと考える方が話が早い。というのは、漢語は現代漢語・古代漢語を問わず、とくに自然現象を描写・陳述する時、場所詞や時間詞を最初に述べ、次にその自然現象の動作（存在や消失・生成・出現・滅亡など）を述べ、最後にそれら動作の主体となるものを述べる処動構造／存現文構造〔S^2-V-S^1〕をとるという語法上の特性を持つからだ。

すなわち、B句はもとB句が変換されたものと看做してもいいし、もともとB句として作句されたと考えてもよい。

cf. 渌水明秋日（李白「渌水曲」）　秋水浄素月（李白「秋浦歌」）

イの訓みは、B句を名詞述語句として捉えたことを意味する。

白髪三千丈（李白「秋浦歌」）／白髪（ハ）三千丈（ナリ）と同じように、「明月」を定語として、牀前（S）ハ明月ノ光（N・P）デアルと解釈するわけだ。いかにも俗受けする読み方で一般にも通行しているようだが、上記の理由により正解ではない。

B句がB句からの変換であるかどうかは別にして、ロはB句の訓みであり、これと混同しないためにはB句は当然ハで訓み下さなければならないことが分かる。

面白いことに、イの訓みの時（即ち名詞述語句として捉えた時）のB句に「看（意識して見る、lookに当る）」を挿入すると当然動目構造句aになる。

a　牀前／看／（明）月光

更に「看」を「見（無意識に見る、見える、seeに当る）に取り代えると客観性が増し表現が動的から静的になっていくことが分かる。

a′　牀前／見／月光（牀前ニ月光見ユ）

この「見」を更に存現動詞「有」に取り代えると客観性・描写性は更に増大し限りなくB句に近づいてゆく。

b　牀前／有／月光

つまり、動目構造のA句は、人間の動作行動にポイントを置いて読者に意思伝達をするのに便な表現句であり、存現構造のB句は、眼前の自然現象を静的・客観的に描写してその状況を相手に伝えることを得意とする句構造なのである。

旅寓のとある明月の一夜を語って、李白がどちらの手法をとろうとしたか、ABどちらがオリジナルと考えられるか、もはや多言を要しまい。

一　「漢文」とは何ぞや

高校の国語教科の中で、現代国語および古文（日本古典）と並び称されることから分かるように、漢文は「日本の古典」としての、いわば日本漢文である。原漢文はあくまで中国古典としての漢文、つまり古漢語であるから、これが日本漢文に「変身」するには何らかの「変身術」が施されねばならない。その「変身術」こそが「訓読法」そのものなのである。

すなわち、もと古漢語の原漢文に訓読（返り点と送り仮名）という翻訳技術を施し、書き下し文に直して変装させれば、曲がりなりにも日本の古文に変身するということになる。その時、その変装の皮衣をしっかり見破らねば、我われはいとも簡単に日本古典漢文＝中国古典漢文というペテンにひっかかってしまうのだ。

両者が同一物であると固く信じている者にその違いを説明し納得させることは難しい。しかし、その違いの原理はいとも簡単なことである。

まず第一に、何故両者は同一視されるのかと言えば、当たり前のことだが原漢文が漢字という表記道具で書かれた同一物だからである。漢字はまだ所記道具を持たぬ日本に漢籍と共に伝来し、片仮名や平仮名を創り出させ大和ことば所記の骨肉と化した。今日、日本人は幼少の頃から約二千字もの漢字を習得し、漢字・漢語を使わない日本語は考えられないまでになっている。この漢字の知識を基盤にして、古来、日本人は同じ漢字で書かれた中国古典をかなりの程度まで「目で見て」理解できる。だが、その理解は個々の漢字の語義のその又一部の理解に過ぎず、決して一つの文章を語音と語法にわたって、つまり漢語としてトータルに捉え理解したわけではないのである。

原漢文はあくまで古漢語であり、原則として漢語の語義と語音と語法で読み解かれねばならない。しかし、古代大和人は個々の漢字の語義を識っているという強みを最大限に活用して、送り仮名と返り点を施し、書き下せば日本古文になるという器用な訓読法なるものを案出した。

こうして訓読された日本漢文つまり漢文は、①原漢文の一つ一つの漢字音はすべて日本漢字音と字訓の混合読みとなっている。②書き下し文の文法は日本の古典文法に則っている（筈である）。③高校漢文の教材では近現代漢語の文は取り扱わない（訓読することができないから）。つまり、それは漢文ではないわけで、よく教育熱心な漢文教師が白文練習と称して生徒に原漢文の読解練習を課すことがあるが、明らかに漢文の範囲の逸脱行為である。大学入試の漢文問題に原文のまま出題するのも同様である。必ず返り点か送り仮名は付さねばならない。④いわゆる日本人漢学者が漢字のみを使って書いた文章は、当然、そのまま漢文と称してよい。但し、和臭漢文という名が示す通り、古漢語としてマスターしたものでない限り、日本人はどんなに頑張っても訓読漢文の域を出ないのは理の当然といえよう。

以上、昨今の世情混濁下にあって、漢文の定義を再確認することは極めて重要である。漢文訓読が定着するまでは古漢語の原漢文はあっても漢文はなかった。ここで訓読法の成立過程とそのありようを検証し確認することは、直ちに漢文教育とその研究方法、研究姿勢と研究目的に関わる重大問題として提起されていると考えねばならない。現に、最近、訓読擁護論者が漢文復活を唱え、漢文教育再興を論じたてる根底には、この漢文定義の自覚と過去に果たした役割の反省を欠いているのではないかと見受けられる節がある。価値観が変わり、学ぶべき目的が多様化している今日、果たして漢文は日本文化の一翼を担

い続け、訓読法は中国古典読解の最善の方法として保証され得るであろうか。

二　訓読法の原理

過去、漢文訓読法が、片言の漢語も解せぬ日本の一般庶民に古漢語の思想や文学を紹介し、日本文化の底上げをはかってきたことは紛れもない事実である。そういう意味で訓読法の果たした功績は大なるものがあった。

だが、日本の古代文化は訓読法成立以前に、そもそも漢字がわが国に伝来した時からその創造・構築が始まったのである。いわば漢字が日本文化の起点となり推進役となり、今日に至るまでその基盤作りに大きく寄与してきたことは疑う余地もないことである。最近、やや影を薄くしてきているが、漢字文化圏という語が象徴するように、漢字が経済的にも世界有数の繁栄をもたらす源となっているという説さえ存在するほどである。

しかし、我われは日本語所記道具としての漢字を一面的に賛美することにのみ性急であってはならない。そのデメリットの面もしっかり見据える必要があるだろう。近くは、日本語の乱れを醸成する大きな原因が漢字にあり、小中学生の国語離れ国語嫌い、ひいては日本人の国語力低下をもたらす最大の原因がこの漢字にある事実をどれほどの人が認識しているであろうか。遠くは、中国文化の導入や日本文化の成立にあたって、漢字が誤解やゆがみを生む触媒の役を果たした事実も事実として認めるに吝かであってはならないであろう。

訓読法がなぜ成り立つかを考える場合も、まず漢字の持つこの功罪両面をしっかり見極めることから出発しなければならない。

一体、紀元前数世紀に書かれた古漢語文献を、中国語を全く解せぬ現代日本人がそれなりに読解するという芸当はどこから生ずるのか。いま、仮に日本語を全く解さぬ一外国人に、いきなり源氏物語を読めと言っても決して読解することが出来ないのは道理である。

ところが、多くの日本人は訓読法によって源氏より一〇世紀も古い古漢語を苦もなく読み解くことができるのである。厳密に言えば、訓読法の最重要要素となる漢字の意味をそれなりに理解するのである。

上述の、道理が道理でなくなる謎を解く鍵は「漢字」であった。日本人は古漢語の所記道具である漢字を読み解くことで古漢語そのものも読み解いたと錯覚している。そのことが、原漢文（中国古漢語）＝漢文（日本古文）の錯覚を生む源になっていることは既に述べた。

奈良平安時代の知識人は中国から伝来した古漢語文献に接した時、初めは曲がりなりにも原音で読み、ヲコト点を添加したりして大和ことばに翻訳しようと腐心したに違いない。そして次第に、単音節語・漢字で書かれた古漢語原漢文が孤立性の強い語順の固定した文構造をしていることに気付き、これに膠着語の特性を持つ日本語の助詞テニヲハをつけて上下操作すれば、そのまま日本古文になることを発見し

た。

日本人は漢字伝来の当初から、又個人個人は幼少の頃から漢字を習い覚え、日常生活に必要な基本的漢字を始め、日中両国の紙誌類で使われる相当数の漢字を共通基盤として持っている。その共通基盤の上に、訓読法は日中両国語の語法の差異を解消する「返り点」を考案し工夫してゆく。

漢語語法の最もポピュラーなタイプは動目構造文である。

〔我・S－食・V－飯・O〕

漢語の一特性が位置語と称されるように、この語順は固定して動かせないのに対し、日本語はテニヲハを使って自由に変更可能である。

イ〔私ハ・S－飯ヲ・O－食フ・V〕

ロ〔飯ヲ・O－私ハ・S－食フ・V〕

ハ〔食フ・V－飯ヲ・O－私ハ・S〕

ニ〔私ハ・S－食フ・V－飯ヲ・O〕

ホ〔飯ヲ・O－食フ・V－私ハ・S〕

ヘ〔食フ・V－私ハ・S－飯ヲ・O〕

このうち、日本語の最もポピュラーな言い方イ〔S－O－V〕にするには、漢語の〔V－O〕の部分をレ点でひっくり返せばよいわけだ。

この外、漢語は否定の副詞「不・非・無」などを動詞の前につけて表現するので、これも一二点をつけて最後に読むようにすれば（……セズ）、即、普通の大和ことばの古文に変身する。

訓読法は、このように、漢語の特性と日本語の特性をうまくかみ合せ巧みに利用して考案したものである。肝心なことは、この芸当は語順不変の漢語だからこそ機械的な記号による変換が可能だったわけで、逆は真ならずなのである。

具象的な夥しい語すなわち漢字を所記道具とする漢語を、大まかで単語数も少ない大和ことばに置き代えようとすれば、勢いそこには同訓異字現象が起きてくる。例えば「みる」と訓ずる漢字は「看・見・視・観・覧・診……」など二〇字ほどもある。又、もともと子音数が少なく、しかも声調という弁別要素を取り入れなかった日本漢字音は多くの同音異字語を生むこととなった。「好、後、抗、港、口、交、侯、公、高、功……。」

これらの齟齬のため、例えば漢語の接続の助字「遂、終、竟、卒、畢、迄」はすべて「つひニ」と訓むし、「則、即、乃、輒、便、曽」はすべて「すなはち」と訓む。文末の助字「也、乎」はまだしも、「矣、焉、哉」などは訓みさえ省かれてしまう。「ああ」と訓む漢字はかれこれ四〇ほどもあるが、筆者の高校時代、「嗚呼」を「ナルコ」、「……耳」を「……ミミ」と読み、教室中の爆笑を買った友人の恨めしそうな顔がいまだに忘れられない。

かくして、訓読法が成り立つ原理はごく単純で、その鍵を握るのが漢字であり、漢字が大きな役割を果たしていることが明らかとなった。だが同時に、漢字は自身の持つ本性のために数多くの矛盾を抱えたまま今日に及んでいることも確かである。この本性とは、一口に「三多五難」と称される。字数が多い、筆画数が多い、読み音が多い、と、

読むのが難しい、書くのが難しい、みわけるのが難しい、覚えるのが難しい、使いこなすのが難しいである。これに、（一字の）字義が多い、検索するのが難しいを加えると「四多六難」ということになる。魔の文字と称される所以である。

三　漢字は漢語と日本語の表記工具である

漢字は昔から「形・音・義で成り立つ」と定義されている。例えば「漢」という字は、「汉（五画）」という字形と「hàn」という字音、それに「漢民族の国」という字義を持っている。音と義は個々の人間の脳裏に記憶され、この字を見た瞬間に想起されて表出するという仕組みになっている。漢字は一般に「表意文字」と称されているが、読音の伴わない文字はないわけだから、表意と表音の二面を持つ漢字は、今後「表語文字」と呼ぶのが相応しい。

角度を変えて眺めてみよう。今や総数六万を超える漢字のうち、その九割以上がいわゆる形声文字である。形声文字は通常義符の偏と音符の旁で成り立つと説明される。例えば、倩、凊、情、清、晴、晴、靖、精、蜻、静、請、錆などは目安になる義符と音符の「青」より成り立っており、「qīng」の発音を覚えておればこれらすべての漢字をほぼ同音で発音することが出来る。形声文字とは文字通り一種隠された姿ではあるが音声を形（あらわ）す表語文字であったのだ。

これまでの漢字の研究といえば、主としてその字形に着目し形義の探究を進めるいわば字源研究が主流であった。だが、今後は、見落とされがちであった語音を主軸に据えて、総合的に原義原音を追究する語源研究の方向で進まねばならない段階に入っていると思う。

さて、わが訓読法が、漢字を共通項として日中両国語の架橋役を果たすことは上述した通りである。日中両国語の所記道具・漢字は、三要素のうち字形は同一だが（現在、中国は簡体字使用のため日中同一字形漢字は常用漢字中では五・六〇字に過ぎない）、字義と字音はその近似値の部分に依拠して橋を架けた（翻訳した）のである。その間の誤差を大きいと見るか小さいと見るかは個人の自由だが、忘れてならないのは、それによって日本語と漢語の壁を観念的にいとも簡単に乗り越えてしまう危険性が常に横たわっていることである。

いま、分かり易く「娘」字でその間の事情を説明しよう。日本の漢字「娘」は音「ジョウ」、原漢字音のうち声調を除いたいわば擬漢音である。字訓は「ムスメ」で、そのまま字義ともなる。一方、漢語ではこれを「niáng」と発音し、「おっかさん」の意味である。――昔からこれに類した誤差現象が到る処に存在したと考えられないだろうか。

ともあれ、訓読の際、我われは擬呉音・擬漢音・擬唐宋音・慣用音・特殊音、更に正訓・義訓をとり混ぜ、古文の文法に則った送り仮名の送り方まで総動員して一気に訓み下すという超離れ技をやってのけるわけである。このウルトラCが凡人にとってもはや一朝一夕にマスターできる代物でないことは誰の目にも明らかで、現に大学入試問題など

で訓読の間違いは日常茶飯事と化しているのである。

多くの時間と経済力、それにエネルギーを費やしてこの難関を乗り越え、当然、訓読法支持者となられた漢文の大家はよく言われる。――訓読法と音読法を比べると、訓読法の方が早く読め、理解度も深い。その証拠には中国人留学生や外国人留学生もが乍ち訓読法をマスターし漢文を読み下してこの方がよく判るという、と。

いかなる外国の古典と雖も、その正確な読解を期するなら必ず当該国の現代語をある程度マスターし、遡って古典に取り組むというのが正攻法である。ところが、中国古典の場合、その道理が道理でなくなる現象があり、それが漢字に起因するものであることを解明してきた。わが国では訓読法が習い性となり、いわゆる音読法と同列に並べて論ぜられ、むしろその優位性が強調されてきた。だが、現実の取り組み方の難易と論理の当否は別である。訓読法の正しい継承が崩れつつある現在、我われは音読法の正統性を名実共に高めていく努力を惜しんではならないであろう。

日常会話レベルの話であるが、中国人学生が日本語をマスターする方が、日本人学生が中国語をマスターするよりはるかに早い。その原因として、漢語には外国人が習得に難儀する声調があり、基本母音が十六個もあり、子音も二十一個あるのに対し、日本語は母音五個、子音十個そこそこの音素体系で成り立つことばであることが考えられる。つまり、中国の学生は日本語習得に当たって自国語の発音要素の大部分を捨て去ればすむのに対し、日本の学生は逆に新たな多くの発音をマスターしてかからねばならない。加えて、前述の如く、発話の際、両者にはいわば六対一の語法上のハンディがあるといえるのだ。両国の学生の頭脳の優劣の問題ではなく、また、決して負け惜しみでもなく、両者にはスタート時点で言語学的難易度の差があったわけである。

中国人留学生がまたたく間に訓読法をマスターし、それを駆使して中国古典を読解する実態を筆者もかつて身近に見た経験を持つ。しかし、それは第一に、その留学生がいわゆる郷に従ったこと。第二に、自身が漢語を母語とすること。第三に、漢語→日本語は比較的（少なくとも逆の場合よりも）容易なこと等が理由にあげられる。その学生がもし自国の大学で勉学する機会と場さえ得られたなら、日本などの留学先でより遙かに早く確実に原漢文を読解できるようになったに違いないのである。

古漢語や日本古典の読解が当国の人間にとってさえ難しいのに、「漢文」はなぜスラスラ読めると言えるのか。その原因・理由について訓読優位論は自ら何の考察も加えていないことを端なくも露呈していると言えまいか。

そもそも人間があるものごとを理解したと称することほどあいまいで恣意的なものはない。しかし、それを客観的に測るものさしはある。それは、その人間が理解したことを基に結果としてどういう行動をとったかによって判断できるのである。

いまここに、自分は古漢語を学び理解したと称する学生がいたとする。そこへ、日本語を全く解しない中国青年が訪れた。その学生が中

国青年に向かって、「子曰く、学びて時にこれを習う、また説しからずや」と百遍唱えた場合と、「学而時習之、不亦説乎」と原語で一度言った場合、「あゝ、それは『論語』冒頭の文ですね」といいつつ握手を求めてくるのはどちらであるか。

グローバル化が進み、遅れをとらないためにはまず外国語をマスターしてことばの交流から始めねばならないこの時期、徒らに訓読法の優位性を説き漢文復活を唱える風潮に対し、頂門の一針として右の話を進呈しておこう。漢字にローマ字をつければ音読することになるなどと短絡する向にも、漢語を漢語として認識する重要性を再三提起し続けねばならない。

四　古漢語の基本文型

言葉の三大要素は、語音・語義・語法である。前節で訓読法が漢字の主として語義を媒介項として古漢語を日本古文に変身させる原理〔古漢語→漢字→日本古文〕を一瞥した。その時、漢字に内蔵された語音も介在していることは当然だが、日中間の漢字音は当初から隔たりが大きく、それぞれ別物（漢語漢字音・日本語漢字音および字訓）として捉える方があたっていることもみてきた。残る語法についても、訓読法は、漢語の基本文型〔S－V－O〕が日本語の基本構文〔S－O－V〕に対し動目構造が逆であることに着目、膠着語日本語の特長である助詞や活用語尾（送り仮名）をつけ加え、返り点を施すことによって日本語擬古文に作り変える工夫であったこともみてきた。

言葉の三大要素のうち、通時的に言えば、語音の変化が最も激しく、語義の変化がこれに次ぐ。語法の変化が最も少ないが、特に位置語と称せられる特徴を持つ漢語は、語順が固定的で、古漢語と現代漢語の語法は根幹部分において殆ど異なるところがないと言ってよい。そこで筆者は、現代漢語の基本語法を基準にして、古代漢語の基本語法を大きく次の六型に帰納し措定してみた。

〔古漢語の六大基本文型〕

一　主述の文型〔S－P〕
　①名詞述語文（主語述語が共に名詞）
　②動詞述語文（主語が名詞、述語が動詞）
　③形容詞述語文（主語が名詞、述語が形容詞）

二　主語・述語動詞・目的語の文型〔S－V－O〕

三　複数主語文型〔S_2・S_1・S－P〕

四　処動文型〔S_2－V－S_1〕（S_2は時間詞／場所詞、Vは存現動詞、S_1は主体語）

一は世界中の言語に共通する基本的文型である。人間は自分の考えを相手に伝えたり、周囲の情景や状況を伝達・描写しようとする時、主語（話題、主体語、目的語の前置されたもの等）を初めに述べ、次いでそれらについて説明・陳述する。

その時、述語が名詞であれば①、

大禹－聖人。／聖人－百世之師也。

動詞であれば②、

花－開、鳥－啼。／鳥－飛、獣－走。

形容詞なら③である。

山－高、水－清。／気候－温暖、風光－明媚。

不思議なことに、実は、現在中国語教育に使われている多くの中国語テキストに、この名詞述語文をきちんと位置づけて解説したものは極めて少ない。つまり、現代漢語の名詞述語文は普通〔A是B〕構文から始めるのが常態となっている。中にはこの〔A是B〕構文を動詞述語文の項目で解説し、名詞述語文の項目がないものさえあるのだが、次例のような日常生活に頻出する会話文は、名詞の単語のみをポンポンと並べて意思を伝達する名詞述語文として説明するのが最適なのである。

今天－星期几？／今天－星期五。你儿子－几岁了？／我儿子－六岁了。我－山东人、他－上海人。現在－几点钟？／現在－三点半。这个－多少钱？。／这个－两块二。您－贵姓？／小姓－苏。这张桌子－三条腿。

また、某『漢文参考書』は［一］の②の例文として次の漢語をあげて解説しているが、

国－定（国が定める）／県－立（県が立てた）

もし、これらが漢語の主述構文であるならば、

国－定（国が定マル）／県－立（県が立ツ）

と解すべきであって、どうやらこれらは、

国－定－教科書／県－立－図書館

などが示すように、もと日本漢語であり、むしろ［二］の構造の変形と考えるべきものである。

［二］は、本来［一］の②の発展した形、つまり動詞述語文が目的語をとる構造である。漢語の根幹をなす構造であり、ふだん出てくる漢語文の七・八割までをこの文型が占める。

仁者－愛－人（『孟子』離婁下）／仁者ハ・愛ス・人ヲ

わが訓読法の原点が、この構文の変換操作にあったことは再三にわたって言及した。

一口に目的語といっても、対象を指す場合もあれば、原因・理由・手段を指す場合もある。二重目的語をとる場合もあり、それが場所語或いは受身・比較を表わす時、O_1とO_2の間に「於」の字を置いて明示するのが普通である。

孔子問礼於老子／孔子礼O_1ヲ老子O_2ニ問フ

某『漢文解説書』は李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩の結句を引いて漢語の主述構文を次のように解説している。

――唯見長江天際流は見（見エル）が述語で、長江以下が意味上の主語になっている。――

この解説は、この解説者に言語学的文法用語の知識が欠如していたことを証明する皮肉な結果になっている。この結句の文法構造は、

（李白S）〈唯〉見V－O〔長江S－流V－天際O〕

という［二］の二重構造になっており、下三字が押韻と平仄の関係で倒置されたものである。

詩題の構造もこの［二］の二重構造なのである。

（我S）〈黄鶴楼〉送V－O〔孟浩然S－之V－O広陵〕

［三］は基本的に［一］の③の発展した構文である。［一］②動詞述語文は目的語をとって複雑な動作行為を表現しようとするが、形容詞は目的語をとる構文を作れない。その分、主語をいくつか重ねることで複雑なニュアンスを表出するのである。現代漢語でいう主述述語文〔象ハS・鼻ガS_1－長イP〕である。

管仲S・字S_1－夷吾P（［一］①→［三］）

帝舜有虞氏S・〔名S_2－重華P〕S_1－瞽瞍之子也（同右）

［四］は、「落雷、降雨、立春、出水のような自然現象および突然起こった現象を、新鮮なおどろきをもって表現したものである。つまりは、話し手が一種の発見ムードを加えて表出した特殊な表現だと考えてよい」（藤堂明保《中国語学》一八〇号1968）

［四］と［三］の相異点については〈導論〉で詳説した。

天S_2〈油然〉作V－雲S_1、〈沛然〉下V－雨S_1（［四］）、〈則〉苗S〈浡然〉－興之矣P（［一］②）〔孟子〕

秋S_3・衡山S_2－雨V－雹S_1（［四］／［三］）〔史記〕

股S_2・無V－胈S_1、脛S_2－〈不〉生V－毛S_1〔韓非子〕

五　乱訓暴読を排す

方块字・漢字は、魔の文字と称される通り、恰も楯の両面の如く功罪相半ばする要素を備えた表記道具であった。その漢字を仲介役として成立する訓読法も、漢籍をわかり易くして日本の庶民に伝え、日本文化の底上げを図った面と、語意や文意や思想をあいまい化したり歪曲して伝えるという側面を持っていた。

その負の側面を端的に示す書が現れた。訓読法に未習熟のまま乱暴に訓読法を操作し、「漢文」の垣根を観念的に乗り越えて古漢語の世界に飛び込み、原漢文を歪曲して日本漢文に変身させようとする漢文訓読書である。

宮崎市定著、礪波護編『論語の新しい読み方』（岩波現代文庫）がそれである。以下、M書と略称する。

M書が、従来の訓みと解釈では「私にはよくわからない」ので、次のように改めると論理的に筋の通った分かり易い文になると主張する里仁篇の次の経文から検討を始めよう。

その従来の訓読と朱子新注を基にした通釈を初めに掲げる。

○子曰、不患無位、患所以立。不患莫己知、求為可知也。（里仁）／子曰く、位なきをうれえず、立つゆゑんをうれえよ。己れを知るものなきをうれえず、知らるべきを為すを求めよ。――孔先生が言われた。自分は本来自分がつくべきポストについてないなどと気に病むな。そ

れよりも、自分がそのポストにつく資格があるかどうかを心配せよ。自分を知ってくれる人がいないことを気にするな。それよりも、人に知ってもらえるような行動をとることを追求しなさい。

M書は、『論語』中より数条の同類の文を引き合いに出して、この経文が論理的に筋の通った文になるためには、次の三ヶ所ほど（傍点部分）字を改める必要があるという。その「新説」に従って経文を改め、訓読・通釈するとこうなる。

※子曰、不患無位、患無以立。不患莫己知、患無可知也。／子曰く、位なきを患えず、もって立つなきをうれう。己れを知るなきを患えず、知らるべきなきを患うなり。――孔先生が言われた。自分がつくべきポストについていないのではないかと気に病むな。それどころか、そのポストにさえつけなくなることを心配せよ。自分を知ってくれる人がいないことを気に病むな。そんなことより、自分には人に知ってもらえる何ものもないことを心配せよ。

みる通り、従来の読み方であれば、経文前半句は、「そのポストにつく自己の能力をこそ問え」と自己修養の必要を説く原漢文が、「新説」によると、「昇進を狙うどころか、リストラの憂き目にあうかも知れないぞ」といういやみの漢文に変身する。

後半句も、「人に知ってもらえるような行動に努めなさい」という励ましの原文が、「どうせ自分はとりえのない人間だと思い知れ」という人を小馬鹿にした漢文に変身することになる。

ここには、訓読法による漢文レベルの理解力であることを忘れ観念的に古漢語のレベルに到達したと思い込み、軽々に原文をいじろうとする諸先達に対しても顔向けできない態度をみてとることができる。「万世にわたる教育者」と賛えられる孔子様も、こうなると一介の塾教師以外の何者でもなかったことが皮肉にも明らかになるわけだ。

「三綱五常（君臣父子夫婦が社会構成の大綱となり仁義礼智信が常に身につけるべき徳である）」と言えば、「孝悌」と共に儒教の根本理念である。また、「忠君愛国」と言えば、今次日中戦争中、神道思想と相俟って軍国主義思想の支柱となり侵略戦争の推進役を果たした中心スローガンである。天皇陛下万歳と叫んで多くの兵士を玉砕せしめ、アジア諸国の人民を悲惨の極に追い込んだ巨悪の思想的一翼を儒教思想が荷っていたことは鉄壁の歴史的事実である。

その起源の一文である顔淵篇の次の個条を、M書は乱訓暴読し、思想的本質を歪めて解釈しようと図る。以下、記述は前条と同じ。

○斉景公問政於孔子。孔子対曰、君君、臣臣、父父、子子。公曰、善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾豈得而食諸。／斉の景公、政を孔子に問う。孔子対えて曰く、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、と。公曰く、善きかな。まことにもし君君たらず、臣臣たらず、父父たらず、子子たらずんば、粟ありといえども、吾あに得てこれを食らわんや。――斉の景公が政治の要諦を孔子に尋ねた。孔子は答えて言う。殿様が殿様らしくあること、家来は家来らしくあること、父親は父親らしく、子供は子供らしくあることです。

公は言う。善いかな。本当にもし殿様が殿様のようでなく、家来が家来のようでなく、父が父のようでなく、子が子のようでないならば、たとえここに食糧があっても、わしはどうして安穏に食べてなどおりましょうか。

従来のわが国および中国の諸先達は、「君君、臣臣」を[一]②動詞述語文として捉え、「君君たり、臣臣たり」と訓み、「人間には初めから君という身分、臣の身分という身分上の差別がきまっていて、人間はそのきまった身分に従って行動すべきなのだ。それがそのまま社会秩序の安寧に繋がり政治の要諦となる。道徳というものも、それぞれの人間のおかれている階級的な差別或いは地位によって定まる。つまり、大義名分は本来的に定まっていて、人民はそこから逃れることはできないのだ」という風に解釈してきた。

これに対しM書は、このように訓み必然的に導かれてくるこのような解釈がお気に召さない。「君君」は「君を君とす」と訓み、「君不君」は「君、君とせられず」と訓むべきだ。さすればその解釈も「君と臣、父と子が相互的に努力しあって美しい人倫関係を建設し、既にあるものに従うのでなく、これから意志と努力によって造り出す」となる筈だという。(「　」は同書よりの引用文)

要するに、M書の主張はこうである。――君主と人民との間には生まれつきの大義名分があるのだとする従来の解釈は間違っている。忠君思想も『論語』の本意ではなく、孔子の名によって後世むやみに強調された部分が濃厚である。よってその曲解のもととなった、「君君」を「君君たり」と訓むことを改め、意志の問題として「君を君とす」と読むべきだ。――

「君君」が[二]になることは、もちろんあり得る。だが、その場合、上の「君」が動詞、下の「君」が目的語(名詞)、主語が省かれていると看做すわけだから、少なくとも通釈の際には省かれた主語を補わねばならない。すると、果たして主語は何なのか。仮にそれが「人民」であるとすれば、「臣を臣とする」以下「父父、子子」も「人民」がそうするということになるがそれでよいか。

実はこの文は決して[二]構文にはならず、[一]の②でしか捉えられないことを直下の「君不君」が証明している。否定の副詞「不」は必ず動詞の上につくもので、上の「君」が名詞(主語)であることを明示しているのである。これを「君、君とせられず」などと乱訓暴読することなど烏滸の沙汰である。

M書の行論には、意識的にしろ無意識的にしろ訓読法のあいまいさを巧みに衝いて原漢文を恣意的に操作し、「断章取義」し「牽強付会」して強引に自説を通そうとする、視点を変えれば被害者にもなる漢文訓読学者の壮大な虚学の世界をのぞき見る思いがする。我われはあくまで正統の訓読法を究め、限りなく正確な原漢文読解への道をめざすべきで、安易に一知半解の訓読法に妥協すべきではないであろう。訓読法を正しく正攻法の従者として位置づける努力を重ねていかねばならないのだ。

後論

孟浩然「春暁」の結句「花落知多少」には、次のように多様な訓み下し方がある。

イ．花落つること知んぬ多少ぞ
ロ．花落つること知りぬ多少
ハ．花落つること知る多少
ニ．花落つること、知る多少
ホ．花落つるを知る多少ぞ
ヘ．花落つること多少なるを知らんや
ト．花落つること、多少を知らんや
チ．花落つること多少なるを知らんや

細かに拾えばまだあろうが、さてどれが正解だろうか。いや、正解はあるのだろうか。これが訓読法の正体なのだと観念すれば、あまり細かな違いに目くじら立てるのは成算的ではない。訓読法の枠内で大同小異と達観すべきなのだろうが、その同じ枠内でいろいろ議論のあるのも事実である。

例えば故碩学吉川幸次郎氏は、――「知多少」は多少なるを知らんや、従って実は「不知多少」、多少なるを知らず、の意である。ある解釈では多少とは多きことをいい、たくさん散りしいたであろうと説いているが、そうではない。と論じている（『新唐詩選』岩波新書）。

これといった明確な判断の根拠なしに他説を非難するのは学究者としての正しいやり方とは言えない。ただ、所詮は同じ訓読法の枠内での議論と考えれば、見て見ぬふりすることもできようか。

「多少」には、①多いと少ない。多寡（多さという量の意）。②どれくらい（疑問詞）。③たくさん、多い（少は助字）。④いくらか、若干（少しの意）等の意味がある。「春暁」詩の場合、吉川説の通り②の意味でとるのが正解なのだが、それは漢語の特色として、知覚動詞「知」が目的語に疑問詞をとる時、「多少（どのくらいなのか）が知る」は、論理上→「どのくらいかわからない」となるからなのである。

次の句なども、馬首を東へ向けて来る人は誰だかわからないと訳さなければならない。

馬首東来知是誰（王昌齢「出塞行」）

その他、散文の文章でも用法は同じである。

これに関して某『漢文解説書』は、――われわれの日常語の表現でも、「知りませんか」といっても「知ってますか」といっても疑問詞としての違いがないように、「不知」とあっても「知」とあっても疑問詞には変わりなく（いったい～かしらという気持ちを表しており）倒置ではない――と解説きこし召している。

この伝に従えば、孔子の名言「知之為知之、不知為不知、是知也」は、一体どういう解釈になるのだろうか。……知ってても知らぬとなし、知らなくても知ってるとなす、これぞ知ってるいや知らないと

いうことだ？？？

鳥肌たつ思いがするのは一人筆者のみではあるまい。

結句は、本来目的語であった〔花S－落P〕$\boxed{一}$②連語を提前して$\boxed{三}$の形にした、基本的にはこれも$\boxed{二}$の構造句である。

〔花－落〕S^1・（我S）－知V－多少O

訓読法に起因する原漢文理解の混乱状況を是正して正解を導き出す方法はあるだろうか。それはある。日本人にとって折角の訓読法であるから、これを副として、しかし、あくまで正攻法を主とする道を追求していくことではあるまいか。

（二〇〇一・三・五記）